

## 「ヨブ記」の諸問題 (一)

植 田 重 雄

旧約聖書の中の「ヨブ記」はたんにイスラエル智慧文学の白眉であるばかりでなく、世界の宗教文学史においても優れた作品の一つに数えられている。この作品はこれを生んだイスラエルの無名の作者によってイスラエルの宗教観を高度な典型にまで高めており、イスラエル古典のあらゆる様相をここに集約し、主人公の悲劇的精神を徹底的に描き出している。その意味で民族的地盤を超えて広く人類全体に共感をよぶ普遍性をもっている。

「ヨブ記」は旧約聖書の正典が編纂されたとき、詩篇、箴言、雅歌、伝道の書、エステル書などとともに諸書(Kethbim)の部の中に入れられた。したがってこれらの諸作品と同様大体においてヘレニズムの時代に成立したものであり、それゆえたんに公的な聖法、信条、条令といった性格のものでなく、イスラエル民族の祈禱、讃歌、随想、民間伝説の物語など、多くの人々に親しまれるような内容であるという点でも共通性をもつ。それゆえいづれも聖法や、宗教教理よりも人々に身近な作品群であった。総じて宗教は教義だけのものであるならば、まだ真に生活に根を下したといえない。文学の血肉をとってはじめて現実生きてくる。その意味でこれらの作品群は、イスラエルの宗教観を政治的公的規範から真に個人的な内容にまで高めているといえよう。これらの中でもとくにヨブ記は、宗教精神を見事に凝集し、ヨブ記に至るまでイスラエル宗教思想がたどって来たいろいろの過程をこの中に反映させている。それゆえ実に多くの問題が含まれているとともに、はげしい宗教観の相剋の形で現わしている。

ヨブ記は、その形式は一種の劇詩表現をとっている(この形態にあてはまる適当な言葉がないので、一応こういう

風に呼ぶことにする。勿論論争詩——詩的形式をとって論争を行——と呼んでも差支えないことを念頭においてこのようにいうのである。）

さて、われわれはこのヨブ記の荒筋をまづはじめに敍べてみよう。そのテーマは「神と罪なき者の苦難」である。登場人物は神、サタン、ヨブ、その友エリパズ、ビルダデ、ゾバル、さらにエリフである。この劇詩の構成の概略は次のようなものである。

ウヅの地にヨブという人がいた。彼は行いの正しい人で、神の誠を全うし、神を畏れる人であったといわれる。ヨブには子供も多く、所有する家畜も沢山いて人々から尊敬もされ、幸福な生活を行っていた。

ところが、ある日、主なる神の前に神の子たちが集ったとき、サタンも一しよに来ていた。主はサタンに「わがしもべヨブの如く、全く、正しく神を恐れ、惡に遠ざかる者はこの世にないであろう」と語ると、サタンは「ヨブが神を畏れ敬うのは、あなたが彼を幸いにし、多くの所有物を与えたからである。しかしもしあなたが彼の所有物を奪ってしまふならば、今は敬虔を粧っている彼もかならずやあなたを誣うであろう」と答える。そこで神は「それならばヨブの所有物をおまえに任せる。ただし彼の生命を損うことがあってはならぬ」と告げる。サタンは神の約束を喜び、ヨブに災いを下す。その結果ヨブは自分の子供や家畜が盜賊や天災のために殺され、奪われる。この時ヨブは立ち上り上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、

わたしは裸で母の胎をいで、

また裸でかしこに歸らん。

主は与え、主は取り給う、

主のみ名はほむべきかな

と神を讃美し、誼うようなことはなかったと敍べている。再び天上の場にもどる。サタンに神は「おまえは、わたしをすすめて、理由なく彼に災いを下したが、ヨブは神を畏れ、かたく神の誠を守って己を全うしたではないか」と云う。サタンは「しかし人間は自分の生命のためには、自己の所有物をささげてでも守るもので、今度は彼の骨と肉を撃つてみてごらんない。必ずやあなたを誼うでしょう」。神はサタンに「ヨブをおまえにまかせ、試みるがよい。ただし彼の生命を奪ってはならぬ」。サタンは神のもとから去ってヨブに更に災いを下した。ヨブの身体は諸々の皮膚病が生じた。今日でいえば癩のごときものであるか。このような悲惨な状況におち入ったとき、ヨブの妻は「こんな状況になっても、なお誠めを守り、全うしようとするのか。むしろ神をのろって死ぬがましではないか」と嘆いたが、彼は「われわれは神から幸いをうけるのであるから、災いをもうけるべきではないか」といって自己の言葉から罪を犯すようなことはなかった。

さてヨブの不幸をきいて、テマンのエリパズ、シュヒのビルダデ、ナアマのゾパルがヨブを慰めようとしてやってきた。しかし彼らはヨブの余りの変り方に、声をあげ、上着を裂き、塵をかむり、七日七夜地に坐したまま言を發するものがなかったと敍べている。以上がヨブ記の序にあたる部分で、この後からヨブと友人の論争による長い対話がつづく。この対話はヘブライ宗教思想における教理と苦難の問題の中心部分をなし、われわれがここで検討しようとする重要な部分なのである。最後に神が登場し、ヨブの敬虔を喜ぶとともに、彼の誤った考えを訂正し、彼の苦難と災いを取除き、以前にまさる幸福と繁栄を与え、長寿を完うして世を去ったというのが荒筋である。

われわれがここで取り上げる問題はまづ、

- (一)、イスラエル宗教の伝統的な教義の一つ、人間の罪の解釈、
- (二)、これに対立するヨブの苦難の体験と宗教的確信

ということからはいつてゆこうと思う。

ここで(一)の教義について、考察するにあたり、従来とって来たヨブ記注解のように、順を追って説明する方法をさけ、ヨブと論争する友人たちの意見を一括して一般の伝統的解釈として見てゆきたい。さらにこの問題を旧約聖書神学の限界内において論ずる前に、さらに視野を拡大して全オリエント、近東、中東文化圏という範囲からも進めてみたいと思っている。現代の考古学の発掘隊は今まで砂漠に埋もれていた古代文化の存在を次々とに報せてくれたために、われわれは古代文化をこの考古学上の成果から一応再検討してみることが必要である。とくに近東中東の発掘には目ざましいものがあり、これの発掘の整理には今後数十年以上の年月を要する。すでに広く知られていることであるが、「ノアの洪水伝説」はヘブライ起源でなく、バビロニア洪水伝説に溯る。ところがこのバビロニアは同じメソポタミアの古い地層に埋まっていたスメール古文化層から発掘された「ジュウストラの洪水伝説」に起源をもっている。大体中近東文化圏の発掘の成果は、たんに王城や土器類にとどまらず大部の文献が発見されたことである。この文献は粘土板にスメール文字で書かれていて、今日これらの文献によってその当時の文化が可成明確に位置づけることができる。

ところで旧約聖書の「ヨブ記」と類似乃至は原初態とおぼしき文献は旧約聖書内ではさきに挙げた詩篇、箴言などに推定されるとおもわれるが、他方エジプト、バビロニア、アッシリアの諸文献からは参考となし得るものは若干あるにしても、類型や原初態は今のところ存在していない。しかるにスメール古文化層の中にこのヨブ記の類型を思わせる文献が発見され、苦心の末に解読された。これを解読に成功したのはアメリカのサムエル・ノア・クレマー教授で、ペンシルヴァニア大学のスメール学、考古学文学の権威である。これを少しばかりここに引用してみると、「人間の苦難、罪」の問題がいかに遠い時代から、しかも広い地域において思索されていたかが分る。

スメールのヨブ記に相当する作品の名は「人間と彼の神」と呼ばれている。これはペンシルヴァニア大学の発掘によるもので、ニップールの遺蹟から今から五十年前に五つの粘土板の断片となって発掘されたが、整理が不充分であったためその全貌が知られていなかった。ところが最近クレマー教授の努力によりようやくその接合と解説に成功した。この文献は諸他の文献遺物から推定して紀元前一七〇〇年頃にエドブバ (edubba) において筆刻され得るものであるというわれている。人間の受ける苦難の主題は各時代の共通の問題であったようで、スメール人も勿論例外ではない。スメールの宗教思想家、教義家も、人間の不幸は人間の犯す罪と過誤にあると考えていた。クレマー教授の解説文は次のようである。

- 一、人間はたえず彼の神の高きをのべよ。
- 二、人は彼の神のみ言葉を素直に讃えよ、
- 三、率直な国の住民を嘆かせ(？)、
- 四、歌の家にて彼の(女の)友と男の友に ……彼を説かせよ、
- 五、〔彼の(？)彼〕はなだめ、
- 六、……………をもたらし、……………をのべ、
- 七、……………をはかり、
- 八、彼の嘆きにより神の御心をなだめよ、
- 九、(何となれば)人間は神なくしては食を得ぬがゆえ。
- 十、人間―彼は偽瞞のところにある惡にたいして彼の力を用いず、

十一、（まだ？）……、病い、劇しい苦悩……

十二、……運命、……、……を彼に身近かにもたらし、

十三、はげしく……彼の……をおおっているそれを（？）……

十四、彼の上にある悪の手を除き、彼が……として取扱われる。

十五、……彼の神、

十六、……彼の中の……、彼は泣き（？）、

十七、……彼は……に向った、

十八、〔涙ながらに〕彼の苦難を神に語る、

十九、……彼の中に（？）……、懲罰、

二十、……。

（二十一—二十五行までは五行破損）

二十六、「われは一人の人間、われを敬うものは榮えず、

二十七、わが正しき言葉は偽りと変れり、

二十八、偽瞞をなす人はわれを南風でおおえり、われは彼に（仕えざるを得ず）、

二十九、われを敬わざる者は、汝の前においてわれに恥を与えたり。

三十、汝はわれにたえず新たに悩みを加え、

三十一、われ家にかえりて、心重し。

三十二、われ人間なれば、街に出でゆけど、心は重し、

三十三、正しきわれに向ひて、わが忠実なる羊飼すら、怒りをなし、われに敵意をもちて見上げたり。

三十四、わが牧人は、わが敵ならざるに、悪しき力をさがし求めたり。

三十五、わが友はわれに真実の言葉を語らず、

三十六、わが友はわが正しき言葉を偽りとなす、

三十七、べてん師はわれを仆さんとたくらみ、

三十八、わが神汝はこれを妨げんとはせず、

三十九、汝は……わが……をもたらし、

四十、悪しき者はわれを仆さんとたくらみ、

四十一、汝は怒り、荒れ狂い、悪をはかり給えり。

四十二、われは賢者、なにゆえにわれは愚かなる若者にたぐえるや、

四十三、われは智慧ある者、なにゆえに愚者の一人に数えられるや、

四十四、食物はいたるところにあり、されどわれは飢う、

四十五、何人もその日の分け前を得、されどわが分け前は苦しみなり。

四十六、兄弟(?)は……を争い、「悪を」たくらみ、

四十七、「彼は……」わが……、

四十八、……………、

四十九、……………を起ち、

五十、……………奪い去り、

五十一、……………粘土の……………智慧を…書き、

五十二、旅の……………を求め、

五十三、道の……………を樹木のごとくきりたおし、

五十四、……………監督者を……………、

五十五、……………管理者を……………。

五十六、わが神よ、「われ汝の」前に立たん、

五十七、汝に語り、……………、わが言葉はうめき、

五十八、われはこれを汝に語らん、わが道の厳しさを訴えん、

五十九、……………の苦しみを嘆き悲しまん。

六十、わが思いの中に……………を賢ならしめ、嘆きは止む時ならん、

六十一、われ……………わが友に……………、

六十二、われ……………わが同僚に……………。

六十三、おお、われを生みしわが母をして汝の前にわが嘆くを止めしむるなかれ



六十四、わが妹をして幸福の歌と讃美を歌わせず、

六十五、彼女をして涙ながらに汝の前にわが悲運を告げしめよ、

六十六、わが妻をしてわが苦難にうめきの声をあげしめよ、

六十七、えらばれたる歌い手をしてわがはげしき運命を嘆かしめよ、

六十八、わが神よ、日の光は全地に輝けど、わがために日は暗し、

六十九、輝く日、善き日は……の如く……、

七十、涙、嘆き、苦悩、迫害はわれをかこめり、

七十一、苦難は泣くより（外なき）者の如くわれを圧倒せり、

七十二、運命の魔力はその手にわれを……し、わが生命の息を奪い去りぬ、

七十三、不吉な病いの悪魔はわが身体をおおひ、

七十四、わが道の劇しさ、わが……の悪、

七十五、……やさしく……、

七十六、……不安の……。

七十七、……でないわれは、

七十八、……の……ならぬわれは……、

七十九、汝のまえにわれは……のごとく……、

八十、――九十四、（大部破損）

九十五、……われ嘆かざるや（？）

九十六、わが神よ、われを生みしわが父なる汝はわが顔を〔あげ給うや？〕、

九十七、無邪気なる牝牛のごとく、哀れにうめき……………、

九十八、いかに久しく汝はわれをすて給ひしや、われを守り給はざるや、

九十九、牝牛のごとく、……………、

百、（いかに久しく）汝はわれを導き給はざりしや。

百一、彼ら——たのもしき賢者は——正しきと眞実をいう、

百二、「罪なきみどり児はその母より生れず、

百三、……罪なき働き人は古よりありしことなし」と。

百四、わが神、わが汝にたいして……せし破壊の……………、

百五、わが汝の前にそなえし……………の……………、

百六、それらを賢き人に……せず、（わが神）彼の上に恵みの言葉を発し、

百七、（日が輝やかざるとき）、わが……………の中、わが……………の中、汝の前にわれを歩ません、

百八、われの汚れと衰えは……………彼らの……………にふれ、

百九、汝が悲しみの日を……せし彼の上に恵みの言葉をたれ給へ、

百十、汝が……………の日を……せし者に、喜びを伝え給え、

百十一、わが神よ、今や汝はわが罪を示し給えり、……………、

百十二、……の門においてわれは、……………を語らん、

百十三、われ、人間は、汝の前にわが罪を告白せん。

百十四、汝は雲のように「神の集い」に雨を降らせ給い、

百十五、汝はわが母がうめきを汝の部屋に……………し給い、

百十六、われに雄々しく、汝が智慧においてわがうめきを……………し給はんことを。

百十七、「その人に」……………神はこたえ給えり。

百十八、「彼の祈りと寛恕を」神はききいれ給いぬ。

百十九、この人を満せる神ははげしい涙とすすり泣き、この者の悲嘆は神の心をなだめたまえり。

百二十、その正しき言葉、その汚れなき言葉を、神は嘉し給えり。

百二十一、この人の祈りの中にて告白せる言葉は、

百二十二、悦ばせり（？）神の御跡、……………そして神は誼いの言葉より手を取って引き出し給えり。

百二十三、……心を苦しめたるもの……、神はかき抱き、

百二十四、その翼をひろげとりつきいし悪魔を神払いに払いのけ、

百二十五、……のごとく彼を打ちのめしし災いを神は取り挫ぎ、

百二十六、彼に定められたる悪運を追い放ち、

百二十七、神はその人の苦難を歎喜に改め給いて、

百二十八、保護と導きの霊を待らせ、

百二十九、柔和な顔の天使たちを……彼に与え給えり。

百三十、「その人は」たえず彼の神の高きを云いあらわし、

百三十一、……をもたらし、……を知らしめたり。

備考 各行の……は数語の欠損によって不明の個所を示し、「」の部分は欠字から推定して、当然そこにあるべき語句として補填されたもの、(?)は字義まだ明確を欠く個所である。

このスメールの随想詩二行——二十行あたりまでは人間が苦難に出あったならば、ひたすら神に嘆願せよという一般的教訓を示している序にあたる部分であろう。次に二十六行から百十六行までは、この苦難をうけた人物が神(これは個人的な仲保者としての神で、万神殿の主神たちではない)に悲嘆を発し、ひたすら哀願をささげている。百十七行から百三十一行までは神が受難の苦しみにこたえ、彼をそれから救い出すという構成である。この苦難をうける主人公は名も不明である。ヨブのようにはじめ神の祝福をうけ、富裕で、賢者で、義人であったということも分らない。ただ悲嘆の内容からそうではないかと推定される。それゆえ旧約聖書の詩篇に見られる苦難を訴える作品、神の恵への感謝の作品などに通ずるものであって、ヨブ記のような深刻な劇的構成、宗教観のはげしい論争対立はなく、高度に高められた宗教文学というものではないが、少くともすでにスメール古文化において人間の苦難が思惟されていたという意味で重要な意義をもっているといえよう。

このスメールの「人間とその神」という作品は相当破損の個所が多く、確実な解説の不可能なところもあるので、

直ちにあれこれと早急に批判を加えたり、比較研究の資料としてはならないが、ここではただ旧約聖書の「ヨブ記」の原初態は、遠くオリエント文化圏の視野の中で発酵し、成熟し、これをすぐれた宗教的天才民族ヘブライ人が、頂点にまで高められたものであるという過程を知れば充分であろう。そしてこの原初態としてのオリエント文化圏の視野とは、基礎的思想として、前記百二、百三行目の「罪なきみどり児はその母より生れず、……罪なき働き人は古よりありしことなし」といわれていることである。

この基本信条はヨブ記自体も倦まず繰返えし、ヨブの友人たちが説いているところのものである。「人はいかなる者か、どうしてこれは清くありえよう。女から生れた者は、どうして正しくありえよう」(二五ノ一四)、「人はいかにして神の前に正しくありえようか。女から生れた者がどうして清くありえよう」(二五ノ四)、われわれは以上の点から、従来のヨブ記の研究において、イスラエル宗教の偏狭な教義にたいするヨブの普遍性の主張といった解釈に若干の修正を加えなければならぬだろう。むしろ偏狭な教義と思われていたものは、少くともオリエント文化圏の視野からみると、普遍的な教義であり、ヨブ記そのものが意図していることは、むしろヨブという人物の仮設によるイスラエルの強烈な宗教的確信の主張であることが一層明瞭になってくる。

さて、ヨブ記において人間の罪の意識は一般にどのような点から考えられているのであろうか。多くの解釈があるが、宗教感情の側面からこれを見ると、まづ人間が神の前に立つとき、神の全能性、嵩高性と比べて全く弱く微少性、有限性を自覚させられるということである。この神の前に立つ有限性と微少性の自覚は旧約思想を貫く、八罪の意識Ⅴにはかならない。(倫理的な面から見ると人間の弱さ、悪への傾向性はこれにとまって生ずる。またこれに附随する諸問題もあるが、ここではこれ以上に立ち入らない)。この場合全能にして聖なる神の前に立つという意識があつてはじめて罪の意識が成り立つのであつて、これなくしては罪はあり得ない。「見よ、彼はそのしもべをさえ

頼みとせず、その天使をも誤れる者とす」「しかし人はどうして神の前に正しくありえようか。よし彼と争おうとしても、千に一つも答えることができない」(九ノ二、三)。

「全能者は——われわれはこれを見出だすことができない。彼は力と公義とにすぐれ、正義に満ちて、これを曲げることはない。」(三八ノ二三) こうした神と人間の緊張関係が繰返えしヨブ記の中でも敍べられている。

こうした人間の微少性は他面においてヨブの悲嘆に見られるように、「たといわたくしは罪がなくても彼(『神』)はわたしを曲った者とする。……『彼は罪のない者と、悪しき者とを共に滅ぼされるのである』と」(九ノ二一—二二)、また「災がにわかにな人を殺すような事があると、彼は罪のない者の苦難をあざ笑われる。世は悪人の手に渡される。彼はその裁判人の顔をおおわれる。もし彼でなければ、これはだれのしわざか」。(九ノ二三—二四)、こうした人生への悲嘆は同時に厭世主義的な色どりさえそえている。伝道の書でも「知者が愚者と同じように死ぬのは、どうしたことであろう。そこで、わたしは生きることをとった。日の下に行われるわざは、わたしに悪しく見えたからである。皆空であって、風を捕えるようである」(二ノ一六後半—一七)と敍べている。

が、ヨブは「神がわたしを泥の中に投げ入れられたので、わたしはちり灰のようになった。わたしがあなたにむかって呼ばわってもあなたは答えられない。わたしが立っていても、あなたは顧みられない」(三〇ノ一九—二〇)と絶望のあまり叫んでいる。

そこでこのヨブ記全般を通じてこの人間の罪の問題について少くとも今まであげた事以外に、幾つかの態度が考えられる。

それはまづヨブの苦難にたいし、テマンびとエリパズがとっている態度である。「考えてみよ、だれが罪のないのに、滅ぼされた者があるか。どこに正しい者で、断ち滅ぼされた者があるか。わたしの見た所によれば、不義を耕

し、害悪をまく者は、それを刈り取っている。彼らは神のいぶきによって滅び、その怒りの息によって消えうせる」(四ノ九)「しかし、わたしであるならば、神に求め、神に、わたしの事をまかせる。彼は大きいことをされるかで、測り知れない。その不思議なみわざは数えがたい……見よ、神に戒められる人はさいわいだ。それゆえ全能者の懲らしめを軽んじてはならない。彼は傷つけ、また包み、撃ち、またその手をもっていやされる」(五ノ一七―一八)、このエリバズの言葉は、神は正しい者にかならず報い、邪悪な者にかならず懲罰を下すという伝統的な応報主義の教義からヨブを批判している。ここに少し註釈を加えておかなければならぬことがある。それはヨブのうけた災いの中でも、人々から忌み嫌われる汚れと呼ばれる皮膚病になったことである。レビ記一三ノ四五に「患部のあるらい病人は、その衣服を裂き、その頭を現し、その口ひげをおおうて『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならない。その患部が身にある日の間は汚れた者としなければならない。その人は汚れた者であるから、離れて住まなければならない。すなわち、そのすまいは宿営の外でなければならぬ」とあるように、ヨブの災いはいわば共同社会から隔離あるいは追放の状態におかれていることを念頭に置かなければならない。

さて、シュヒびとビルダテは次のように云う。「神は公義を曲げられるであらうか。全能者は正義を曲げられるであらうか。あなたの子たちが彼に罪を犯したので、彼らをそのとがの手に渡されたのだ。あなたがもし神に求め、全能者に祈るならば、あなたがもし清く、正しくあるならば、彼は必ずあなたのために立って、あなたの正しいすみかを榮えさせられる」。この友もやはり侵した見えざる罪とその悔改めの伝統的な教説を説く。これはすべて「先祖」から、「優れた知者から」語り伝えられた教義の立場からヨブを説得しているにすぎない。

さらにエリバズはヨブの憤りにたいして彼をばげしくのしり、ヨブの悪と罪の大なることを数え上げる。そして自己の正しさを徒らに主張せずに、「神と和らいで、平安を得るがよい。そうすれば幸福」(二二ノ二一)が必ず到来

し、現在の苦惱は消え去るであろう。なぜなら「汝（＝神）は高ぶる者を低くされるが、へりくだる者を救われるからだ。汝は罪のない者を救われる。あなたはその手の潔いことによって救われるであろう」（二二ノ二九―三〇）この友はヨブが神にたいして誠を破り、罪を犯した事実があるなしにかかわらず、神に自己の罪を云い表わし、ひたすら懺悔をするようにすすめる。このような考えは、スメールのさきにあげた「人間とその神」の冒頭と比較してみると興味深い。人間は神にたいし一被造物にすぎないものであってみれば、事の善悪を越えて悔い改め、ひたすらへりくだり懇願し、嘆願するよりほかに道はないではないかと叫ぶ。なぜならば「人は神の前に正しくあり得ず、女から生れた者は清くあり得ない」からどのようにしても、罪を犯さないということはまぬがれがたい。それゆえ神に嘆願するよりほかにない。こうした嘆願や祈りは旧約聖書の中に無数見られる。とくに詩篇はその代表的な作品といえるであろう。

これらの友人たちの勧告にたいして、ヨブは自己に課せられた苦難の余りに大きいことに憤るとともにあくまで自己の潔白を訴えてやまなかった。

「どうかわたしの憤りが正しく量られ、同時にわたしの災も、はかりにかけられるように」（六ノ二）、「まことに、わたしのうちに助けはなく、救われる望みは、わたしから追いやられた」（同二三）、そして友人たちに次のように求める。「わたしに教えよ、そうすればわたしは黙るであろう。わたしの誤っている所をわたしに悟らせよ。正しい言葉はいかに力のあるものか。しかしあなたがたの戒めは何を戒めるのか。あなたがたは言葉を戒めうと思うのか。望みの絶えた者の語ることは風のようなものだ」（六ノ二四、二五）ヨブは神にたいして次のように訴える。「たといわたしは正しくても、わたしの口はわたしを罪ある者とする。たといわたしは罪がなくても汝（＝神）はわたしを曲つたものとする。」（九ノ二〇）、「わたしは自分の命をいとう。わたしは自分の嘆きを包まず云いあらわし、わが魂の苦



しみによって語ろう」(二〇ノ一、二)、そしてゾパルの言葉にたいして「見よ、わたしの目は、これをことごとく見た。わたしの耳はこれを聞いて悟った。あなたがたの知っている事は、わたしも知っている。わたしはあなたがたに劣らない」と答え、「見よ、汝(『神』)はわたしを殺すであろう。わたしは絶望だ。しかしなおわたしはわたしの道を汝の前に守り抜こう。これこそわたしの救となる。神を信じない者は、神の前に出ることができないからだ」。(一三ノ一五—一七)「地よ、わたしの血をおおてくれるな。わたしの叫びに、休む所を得させるな。見よ、今でもわたしの証人は天にある。わたしのために保証してくれる者は高い所にある。わたしの友はわたしをあざける、しかしわたしの目は神に向かって涙を注ぐ」(一六ノ一八—二〇)、「まことにあざける者どもはわたしのまわりにあり、わが目は常に汝らの侮りを見る。どうか、あなた(神)自ら保証人となられるように。」と神に訴える。

ヨブはさらに神への窮局の確信をも次のようにのべる。「わたしは知る。わたしをあがなう者は生きておられる。後の日に汝は必ず地の上に立たれる。わたしの皮がこのように滅ぼされた後、わたしは肉を離れて神を見るであろう。しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこられる」(一九ノ二五—二七)、そしてヨブは神の座に迫り、神に直接訴えたいとのべる。

「どうか、汝を尋ねてどこで会えるかを知り、そのみ座に至ることができるよう。わたしは汝の前にわたしの訴えをならべ、口をきわめて論議するであろう。……汝は大いなる力をもって、わたしと争われるであろうか。いな、かえってわたしを顧みられるであろう。かしこでは正しい人は汝と云い争うことができる。そうすれば、わたしはわたしをさばく者から永久に救われるであろう」(二三ノ三、四、六、七)、「神は生きておられる。汝はわたしの義を奪い去られた。全能者はわたしの魂を悩まされた。わたしの息がわたしのうちにあり、神の息がわたしの鼻にある間、わたしのくちびるは不義を云わない、わたしの舌は偽りを語らない。わたしは断じてあなたがたを正しいとは認めな

い。わたしは死ぬまで、潔白を主張してやめない。わたしは堅くわが義を保って捨てないわたしは今まで一日も心に責められた事がない」(二七ノ二―六)と叫んでいる。さらにヨブは次のような悲嘆を発する。「ああ過ぎた年月のようであつたらよいのだが、神がわたしを守ってくださった日のようであつたらよいのだが。あの時には、汝のともしびがわたしの頭の上に輝き、汝の光によってわたしは暗やみを歩んだ」(二九ノ二、三)「神がわたしを泥の中に投げ入れられたので、わたしはちり灰のようになった。わたしがあなたにむかつて呼ばわっても、あなたは答えられない。わたしが立っていても、あなたは顧みられない。」(三〇ノ一九、二〇)

以上いささか煩雑をいとわず引用したが、友人三人とヨブはそれぞれはつきり異つた態度であることは明白である。しかも両者は相容れることのできない主張として対立している。まず、友人たちは伝統的な教義をどこまでも固守してその観点からヨブの苦難を解釈し、その解釈をもってヨブに納得させようとしている。はじめは彼らはヨブを慰めようとするのであるが、論争は対立し高潮して、ヨブの頑な態度に非難さえ加える。この友人たちの立場は教義にしたがつた言説であつて、たとえその内容が優れていたにせよ、ヨブのような苦難の体験をしていない。ヨブの苦しみは当事者ならぬ友人たちには理會でできなかった。たとえヨブに同情はできても、そうした苦しみを知り得ない筈のものである。しかしこれはたんに苦難を蒙っている当事者以外はその体験を知り得ないという問題だけに留まるものではない。体験の認識の有無だけではない。ヨブは友人に繰返えし「あなたがたの知っていることはわたしも知っている」(一三ノ二)と答えている。それゆえ、友人たちが説得の抛り所としている伝統的な教義や教説はヨブは友人たち以上に知悉しているのである。ただヨブにとって教義は知っているとすること以上のものであつた。むしろヨブの体験としてうけている苦難の実存のまへにはこれらの言説、教義は無に等しいともいえよう。彼は自己自身の体験からすべてを出発させなければならなかつた。宗教は体験から始まる。体験なくしては何ものも意味をもたない。宗教

体験を通してのみ啓示が示される。しかし体験だけで成り立つものではない。それらは個人の体験を通して、広く一般に宗教意識を形成するとともに、信条や教義となって生きた教団や社会に活動しなければならぬ。もし個人の宗教体験も一個人だけの法悦に留まるならば、宗教価値の実現は不可能である。宗教思想と宗教体験は一般にこのような關係をもつ。ヨブの直面している問題は正しい道を歩んだ人間がなにゆえに不当な苦しみをうけなければならないかという主体的な問題となっているということである。無論、神の誠めを全うしたヨブという人物は劇的な設定である。しかしこれを通して、人間がその行為から予期されない思慮を絶した苦難を味うことが如実に示される。ヨブは身にふりかかった多くのしかももっとも耐えがたい苦しみを体験する。ヨブ記には苦難という総括概念のもとに絶望、輕蔑、嘲笑、おそれ、不安、誤り、災い、病苦、死、その他無数の人間存在に起り得る苦難をあげている。まさに生老病死の煩悶である。しかしこれを感じる意識を取り去ることで苦難は消滅するものであろうか。ヨブ記にはこのことは少しも触れていない。また人間存在＝苦悩というような定式で考えられる問題であらうか。なぜなら人間には苦難と同様に幸福や喜びも与えられているからである。

この抒事詩を読んでわれわれは苦難に眼をそらさず勇敢に挑んでいるイスラエルの宗教精神の具象化された巨人としてヨブを感じることができる。伝統的な教義を受けいれるにせよ、拒否するにせよ、いづれにしてもヨブは自己の実存の主体的な体験そのものの実感からこれを考えているのである。ヨブの苦難の問題はイスラエルの人間論の新しい展開を予告し、同時にキリスト教の人間論を一貫する受難の宗教態度に結びつくものとなる。それにしてもわれわれはまだヨブ記のまだほんの入口に立っているにすぎない。イスラエル宗教の罪の觀念、普遍主義と特殊主義、苦難の宗教的把握の問題などにふれなければならないが、紙数の制限をもちや超えているので、また別の機会に論ずるところにする。

## 参 考 文 献

- Man and his God, Wisdom in Israel and in the Ancient Near East, (A Sumerian Variation on the "Job" Motif; Samuel Noah Kramer,  
Kautzsch; Die Heilige Schriften des Alten Testament II,  
Biblia Hebraica, Ed, Rudolf Kittel.